

OCUAC NEWS

1998.10.1

チベット、ニンチンカンサ（7206m）登頂！ タクラマカン砂漠ロプノール踏査

前号でお知らせしたように、会員の武部秀夫氏が日本ヒマラヤ協会の、チベットニンチンカンサ峰遠征隊に参加、登頂されました。また、それに先だってヘディンの「さまよえる湖」ロプノールに水を求める踏査探検も行われました。

ニンチンカンサ登山隊1998登頂記

（西稜新ルートより登頂） 武部秀夫

8月15日（土）午前3時30分 高度6350mの第2キャンプ。田村さんの「起きよう」という声で目が覚める。テントの外を覗くと星と月が出ている。ガスが多少でている様子であるが問題ない。BC建設以来、5000m以下だとほぼ毎日雨、それ以上だとみぞれか風雪が続き、好天がほとんどなかった今夏のニンチンカンサ峰にあって例外的なアタック日の気象状況である。同時に今日1日のみのチャンスであることが第2キャンプの3人（田村、山本、武部）には暗黙に解っていた。7206mの頂上まで約850mこの標高差を登り、安全に下降するには12時間行動は覚悟しなければと各人が思い、朝食は多めに食べる。そして早朝から水を大量に作り飲んだ。

まだ暗いなか午前6時30分ヘッドランプをつけ出発する。第2キャンプから上部10ピッチ程は6700mあたりまですでに固定ロープが西稜上を忠実にフィックスされており、ユマールをセットし比較的スピードをあげ高度を稼ぐ。少しずつ明るくなりはじめ遠くニンチンタングラ山群かと思われる雪山が目に見える。

下方を見るとBC、氷河湖にABC、コルにC1、西稜雪の台地にC2と各キャンプがはっきり見える。逆に各キャンプから我々3人が見られているのでチョンボはできない。

第2キャンプからの西稜上部は雪壁の連続で、斜度が一部30°程になっているが雪の状態は非常に良い。フィックス終了地点からはデボしていた固定ロープを持ってさらに主稜線にむけて8ピッチ程、フィックスしていく。しかしそれでも主稜線へ届かない。最後は主稜線の左のクローアル状の雪面を2ピッチ、ステップを深く作っていきながらノーザイルで、田村、山本、武部のオーダーで左上する。午後1時30分主稜線にでる。近くトゴロン峰がときおり見えだが、主峰方面はガスが切れず視界が悪い。下降時を考え、この地点に赤旗を立てておく。主稜線上は雪が腐っておりここでアイゼンを脱ぎバイルをデボする。下方は西稜のラインが美しい。トゴロン氷河がズバツと切れている。

主峰へ東に向かってくるぶしまでのラッセル。行く手右つまり南側のカク氷河源頭への雪庇に注意を払いながら、赤旗を要所要所に立てつつ進む。午後2時20分濃いガスの中だがかすかに前方が下っている地点に着く。どうやら頂上らしい。10分待ってもガスがきれない。高度計も7100mを指している。

田村さんと協議し「頂上である」と判断する。ABCの隊長はじめ各キャンプと交信する。田村さんから隊長へ「とうとう頂上につきました。西稜を完登しました。ありがとうございました。・・・」山本さんも興奮状態で3人抱きあい感激に酔う。が、しかし・・・



ニンチンカン西面マウンテン 4600mより

その時、東側のガスが一瞬切れた。目の前にもう100mから150m程高い雪のドームが見えている。3人唖然として「あれが頂上じゃないですか。」すぐに状況を隊長に交信する。ABCの隊長はじめ各キャンプも愕然とする。「とにかくあれを登るしかありませんね。」ここからの最後の登りが今遠征で一番しんどかった。頂上とあやまったピーク（実は北西稜とのジャンクションピーク）から20m程雪面を下降し、雪のドームの正面を喘ぎながらゆっくりと登る。登り切るとさらに稜線が続くが高低がない。やがてガスの切れ目に北稜が見えだす。3人そろって頂上に立つ。午後3時30分やっと登頂した。「幸福の源」である聖山の頂上雪面に最後の赤旗を立てる。

「関根隊長感度ありましたら応答願います。こちらアタック隊。」「さっきはどうも申し訳ございません。今本当の頂上につきました。みなさんのご支援ありがとうございました。」と田村さんの落ちついた声も少々照れくさい声が頂上に響きわたる。

「頂上に着きました。西稜という新ルートから登頂させていただいて本当にありがとうございました。いろいろな方々からのご支援を登頂という形で昇華できてうれしいかぎりです。」さわやかな風が吹いていた頂上だった。

午後4時ガスも晴れないので下降に移る。ドームの下りは下降1ピッチ目を懸垂下降する。4時45分主稜線から西稜下降点の赤旗地点に戻る。このころから風雪激しくなり吹雪となる。登降時ノーザイル2ピッチの所は予備のスノーバーを支点に懸垂下降する。以降夕暮れ迫る吹雪のなか18ピッチの固定ロープをたよりに第2キャンプまで延々と、武部、山本、田村のオーダーで下降する。

午後7時45分猛吹雪のなか武部が少し遅れて先行2人が第2キャンプに無事帰幕。13時間30分の行動だった。ほんとうに今遠征中一番天気もった1日であった。

隊長、登攀隊長に3人無事に第2キャンプにもどったことを報告し、水を作りほっとしたのは11時過ぎだった。「しんどかったけど1チャンス最大限にいかしたね。よかった」と田村さん。そのかたわらで山本さんが雪盲のため目が痛い痛い大変。翌日は朝から吹雪、武部がABCへ下降。田村さんは山本さんに付き添い第2キャンプでもう一泊停滞。メンバーの祝福を受けながら3人が再び会えたのはABCにて8月17日の午後3時30分だった。隊員全員の力でニンチンカン西稜を初登攀し、登頂でき、事故なくベースキャンプにもどれたことを心から感謝します。そしてチベットの仏様に感謝します。

日本ヒマラヤ協会ニンチンカンサ（7206m）登山隊1998 記録短信

ニンチンカンサはラサを囲む4つの聖山の1つ（東ヤルラシャンポ、西ニンチンカンサ、南クーラカンリ、北ニンチェンタングラ）山名は『幸福の源』という意味。

①遠征隊の概要

目的 チベットの高峰ニンチンカンサ峰（7206m）の新ルート（西稜）からの登頂
派遣母体と隊構成 日本ヒマラヤ協会
関根幸次隊長（わらじの仲間）以下全国から会員10名
遠征期間 1998/7/19-8/25（登山期間20日間）
中国側スタッフ 連絡官 楊建国 43歳 中国登山協会常務委員行政部長
通訳 楊国勇 21歳 中国登山協会
コック 王洪奎 35歳 チベット登山協会
その他ドライバーの方々は全員チベット登山協会（ジープ3台・トラック1台）

②登山隊の成果

- ・西稜（ノーマルルートは南西稜から南面）を初登攀する。
- ・8月15日15時30分西稜から主峰（7206m）を登頂する。（通算6登目）
- ・全員登頂ならず3名のみ登頂。（田村、山本、武部）
- ・テイクインテイクアウト 隊で持ち込んだものは回収（分別回収）し、ラサまで持ち帰る。ゴミは焼却。ただしC2から上部のフィックスした固定ロープ18ピッチ分（900m）は回収できなかった。

③日程

- 7/18 東京HAJルームに集結
- 19 成田→北京（CA926）直行便で3時間30分の楽なフライト CMA交流部趙建軍出迎え
- 20 北京→成都（4106便）気温28℃ しかし蒸し暑い。
- 21 成都→ラサ ミニヤコンカ見えず、ナムチェバルワ見える。
- 22 ラサ TMAにてデポ品チェックと食糧追加購入及び再梱包。
- 23 ラサ ラサ河対岸の4000mの小山で高度順応トレーニング
- 24 ラサ→ランカズー なつかしのカンバラ（4700m）を越える。雨天で山見えず。
- 25 ランカズー→BC予定地偵察→ランカズー ジープ終了地点から2時間4900mまで
- 26 ランカズー 街の裏山（タルチョー山）4600mで高度順化トレーニング
- 27 ランカズー→BC カロラを過ぎ西面にはいりマユン村経由ヤク28頭で4800mBCへ
- 29 ABC建設 5300mの西稜取り付き地点氷河湖畔のトゴロン氷河末端に建設
- 8/1 C1建設 5800mの西稜コルに設営 非対称山稜上プラットホーム作り2張設営
- 10 C2建設 6350mの西稜上台地に設営1張
C1からC2間はルート中一番の傾斜（35-45°）で17ピッチ850mFIX
- 15 C2→頂上→C2 3:30起床-6:30出発-13:30西稜完登-15:30登頂-16:00下降-19:45C2着 C2から上部は13-15日で18ピッチFIX済。FIX終了地点以降主稜線への2ピッチと主稜線はノーザイルで行動
- 16 C2→ABC
- 17 ABC→BC
- 20 BC→ラサ 夜に大雪。ヤク17頭にてマユン村へジープ3台、トラック1台でラサへ。
ラサ着は23:00 長い1日。
- 21 ラサ TMAにてデポ品整理と帰国隊荷の再梱包
- 22 ラサ ポタラ宮見学と八角街/ジョカン（大昭寺）散策 夜TMA主催宴会
- 23 ラサ→北京 直行便で北京へ
- 24 北京 万里の長城と故宮見学 夜CMA主催の登頂祝賀会 登頂証明書頂く。
- 25 北京→成田（CA925）CAACのスタッフの手遣いでファーストクラスに乗る。

④ニンチンカンサ西稜クロニクル

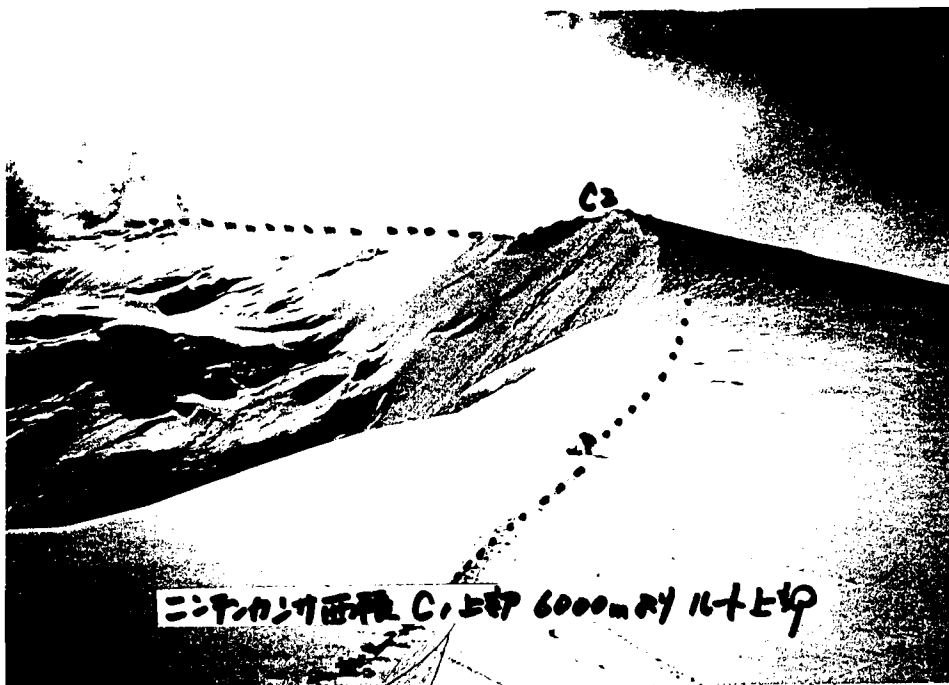
BC 4800m トゴロン氷河末端下流の左岸草地に設営。マユン村からヤクで2h。対岸（右岸）にゴンパ跡あり。西稜が左に南西稜が右に見える。

ABC 5300m トゴロン氷河が5596mポイントのインゼルで分岐している。北氷河末端下に氷湖あり。湖畔のモレーン上に設営。正面に西稜が見える。

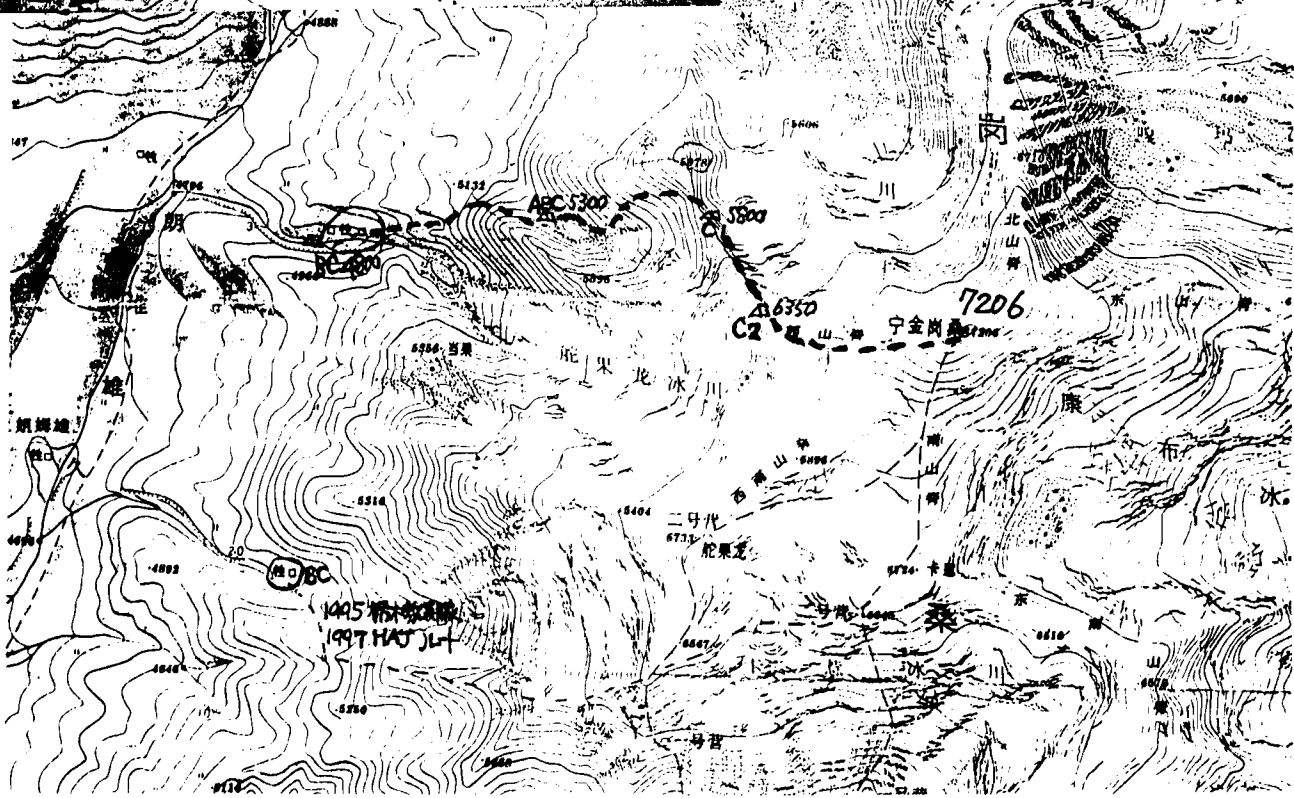
C1 5800m ABCから氷河湖右岸を進み、氷河末端左側の大滝を登る。左側の5978mの岩のピークから岩稜とのコンタクトラインにそってザレを急登。5500m（雪線ライン）より左上していく。潤沢ザイテングラード状の斜面をひたすら登ると西稜コル。コルより右へ岩稜すぐ。

C2 6350m C1から岩稜を20分で雪稜雪壁が始まる。17ピッチFIX。急なところで45°の斜度。登るきると台地状になるここに設営。

頂上 7206m C2からも主稜線6900mに向けひたすら雪稜雪壁が続く18ピッチFIX平均斜度30°主稜線からは単純な雪稜。頂上は雪面。



THE MAP OF SNOW MOUNTAINS
IN CHINA
宁金岗桑 NORTINKANGSANG
1/50000 MAP



『さまよえる湖』の水をもとめて・・・

タクラマカン砂漠ロブノール踏査探検行 1998.6.5-6.20

武部秀夫（日中合同ロブノール探検隊'98）

プロローグ

1996年12月30日 私はインドのラジャスタン州タール砂漠を2頭の駱駝と1人のムスリムと旅をしていました。名前はラジャー（駱駝年10歳）、ラジュ（7歳）そして19歳のディナ。この日から2泊3日の砂漠の旅が始まります。360度地平線のタール砂漠。サハラ砂漠やタクラマカン砂漠とはどんなところだろう。どんな砂漠の民がいるのだろうか。満天の星の下でうとうととしていました。いつかチャンスがあれば行ってみたいと思いながら。ヒマラヤとは大きく違った地域を大胆に踏査してみたい。

ロブノールへの旅

タール砂漠行から1年6ヶ月後。1998年6月5日-20日関西の探検好きのグループ10名、中国側からは新疆TVはじめ新疆中国旅遊社などのスタッフと合同で中国新疆ウイグル自治区にあるロブノールをジープで縦断し『水』をさがす踏査探検行に参加しました。トルファンからロブノールを北から南へついきり北緯39度35分48秒、東経90度05分21秒の地球上のポイント（ロブノール南限湖岸域）に1993年には実在していた幅300m長さ1kmの『水場』を求め、さらにはクムタング砂漠を北東にハミまで約700kmの砂漠踏査でした。

6月5日（金）関西空港（15:35）CA922便
→北京（19:30）

前日はOBの方々と毎日新聞、放送の方々20名の、7月からのチベットのニンチンカンサ峰遠征の壮行会をしていただき、二日酔いで関西空港に向かう。空港で広瀬さんの見送りをうけ日本側隊員10名集結。予定通り関空出発、上海にて1時間のトランジットの後北京時間19時30分に北京首都空港に無事到着。四光峰遠征以来9年ぶりの北京市内へは高速道路ができていたり高層ビルが多く、中国の変貌に驚くばかり。北京にて中国側スタッフの楊青さん、呉江麗さんと合流。王府井の台湾飯店に投宿。

6月6日（土）北京（14:40）→ウルムチ（18:10） くもり

午前中は故宮見学。いつ見ても紫禁城のスケールの大きさには恐れ入る。昼から新疆航空便でウルムチへ。18時過ぎ無事到着、3時間30分のフライトは長く感じる。雲が多く砂漠や天山山脈が見えなかった。ウルムチ空港で新疆TVが待ちかまえていたのにはまいりました。新疆にやっと着く。遠い。自治区の区都ウルムチは人口150万の大都市。旧市街はウイグル人が多く、新市街は漢人の町。高層ビルが建ち、本で読んだ面影はなし。空港から40分程で新市街の海港酒店に投宿。新疆側が気を使ってか、5つ星ホテル。北京時間なので18時といえども昼のさかり実際は4時くらいの感覚。21時より旧帝政ロシア時代の領事館であった伝統あるコンロン賓館で中国側スタッフと合流、そして宴会。アルコール度56度の白酒の限りなきカンペイにまいる。新疆TVからの毛さん、曹さん、ジープ隊の李さん、宇さん、王さん、劉さん、トラック隊に新疆中国国際旅遊社副社長のワンオーさんらを紹介される。明日からトルファンに向かう。通訳の楊さん張り切り、その後バザールでシシカバブーを食いながら新疆ビールをやる。

6月7日（日）ウルムチ（9:50）→トルファン（14:00） くもり

トラックはトルファンで合流予定。ジープ4台で出発。すべてランドクルーザーで内2台は新車ランドクルーザー100。途中の達坂城までは緑が目にはいり豊かさを感じる。トルファンへも高速道路建設中。ウルムチトルファン間180km中風力発電用の大風車を多く見る。トルファン手前35km地点から砂漠地帯にはいる。シルクロードにきた。トルファンは天山からの水をカレーズという地下水道で灌漑にあて緑多きオアシス。ウイグル人が多い。トルファン賓館に投宿。ドイツダイムラー製の48馬力のトラックと合流。食糧を買い足し、午後から西郊の交河故城を見学。漢代（BC2世紀）の西域経営の中心地安西都護府があったところ、気持ちは2000年前ヘタイスリップ。暑い。気温38度湿度20%。

6月8日（月）トルファン(9:20)→トクシン
(14:00,15:00)→TS1(クルターグ山中 N41°
44'14", E89° 53'37" 19:40) くもり

ジープ4台、トラック1台にて出発。すぐに南下する
と思っていたが火焰山、高昌故城、ベゼクリク等立ち
寄り、最後の町トクシンにて昼食。ここから一路ロプ
ノールへ。岩砂漠砂漠の中、わだちを見つけながら
クルターグ山脈をめざす。標高3000mまでの山脈で行
けども行けども砂漠。5時間弱で野営。標高1240m。

6月9日（火）TS1(9:25)→TS2（ロプノール
北湖岸ヤルダン群 N40° 48 '26", E90°
13'48" 19:20) 走行距離180km くもり

TS1より25分で塩水の井戸着 (N41° 34 '44", E89°
46'31")。ここから南東に進む。ヘディンがよくベ
スキャンプに使ったアトミッシュブラク近くのN41°
10 '27", E90° 12'06"地点で昼食。タマリスクが多く
生えていて掘れば水が出てきそうなところ。その後河
床にでる。ところどころに塩水の水たまりあり。ここ
でトラック1回目のスタック。この河の名はない。16
時大きな河床との合流地点 (N41° 02 '05", E90°
15'42") から南に進む。17時35分最初の大きなヤル
ダン（風化堆積丘）群に出会う。高度がぐっと落ち
990m(N40° 54' 05", E90° 13'48")。地図からはロ
プノール北湖岸河口近く。約2時間のヤルダン群の走行
で本日のテントサイト着。ほぼロプノール北湖岸。こ
のヤルダン群を1934年カヌーで漕行し湖上から見てい
たヘディンを思うと感無量。今は干し上がり水なし。
920m。気温30度湿度25%。心地よい気候。

6月10日（水）TS2(9:10)→TS3（N40° 05'
01", E90° 18'04" 20:25) 早朝雷雨後く
もり

出発後の10:20ロプノール湖底に到着 (N40° 38'
56", E90° 13'57")。真南に方向をとる。行けども行
けども360度地平線、全く景色に変化なし。しかし湖
の地形は砂から塩殻に変わり、大きいもので直径1m程
の亀甲状の起伏ある地形になる。ジープは走行が苦し
く、隊員が降りる。先行のトラックの後を歩く。18時
30分走行絶望的。気温39.8度湿度13%。3kmを2時間
かけて進む。暗くなりだしたので20時25分行動打ち切
り。ロプノールのほぼ真ん中で野営。

6月11日（木）TS3(9:05)→TS4（N39° 48'
00", E90° 17'33" 22:05) 晴れ

塩殻帯突破する方策は1つ。トラックは8トンの自重
でなんなく走行可能だが、ジープが問題。トラックが
道を造るがジープとの車幅が違い中央部に塩殻が高く
残るため車高ありと言えどもあたってデフがやられる。
よって朝一番から日本・中国全隊員でつるはしとスコッ
プで塩殻潰しをやる。気温40度を超える土方作業は厳
しい。3時間程進んだところで地形変わり走行可能にな
る。えんえんと南下すること8時間、ようやく南湖岸を
遠くに目視する。22時過ぎ南湖岸に上陸と思うが実際
には島に上陸。

6月12日（金）TS4(10:30)→TS5(11:10)
晴れ

隊長・中国側2名の計3名にて『水』発見探査の偵察
隊をだす為、本隊昨日の野営地から見晴らしの良い場所
へ移動する。後ロプノールでの休養日。暑い。風強し。

砂漠の夜は満天星と満月。野営地が島なので目の前
がまるで静かな海のような錯覚を覚える。WALKMAN
を耳にしながら星を見ていると最上の至福を感じる。

6月13日（土）偵察隊帰幕(14:50)→『水場』
へ出発(15:15)→水場着(16:40)→TS5(19:00)
→TS6(21:30) 晴れ

15時近く偵察隊戻る。1993年には幅300m長さ
1km程の水があった地点を偵察したが『水』はない。
しかしジープ4台にて全員及びTV撮影を兼ね出発。ア
ルチンターグ山脈を左に見ながらロプノール南湖岸線
に添い、北緯39度35分48秒、東経90度05分21秒地
点をめざす。確かにタマリスクがここだけ繁殖してい
るが、今は水がない事実を確認しテントサイトに戻る。
そして東に向け出発し2時間30分で高度が1000mの砂
砂漠で野営。(N39° 50 '54", E90° 46'09")

6月14日（日）TS6(8:25)→彭加木石碑ポイ
ント(17:00)→TS7(22:00)

17時最高気温48℃湿度8%記録 晴れ

ロプノール南湖岸を東に進む。アルチンターグ山脈
からのワジが10数本ロプノールへはいつている。砂砂
漠なのでルートを選びながら進む。17時、中国の砂漠
探検家彭加木が1987年6月17日に行方不明になったと
ころに石碑がある (N40° 12 '16", E91° 52'29") が、

ここで供養をする。暑い。ついに気温48℃湿度8%を記録する。22時ロプノール東端の砂砂漠にて野営。
(N40°18'17", E92°11'24")

6月15日(月) TS7(8:15)→6/16 7:00/ハミ
加格達賓館着 晴れ

出発後すぐにトラックがスタック。前輪左右60cm砂に埋まる。今度は簡単に脱出できそうもない。延々6時間日本中国全隊員で砂をかきだす。気温40.8℃の中全員バテる。砂砂漠のアリ地獄は恐ろしい。脱出後進路を東北東にとる。敦煌への分岐地点の北緯40度20分55秒東経92度16分02秒を過ぎ、ロプノール湖岸のタマリスクが多く繁殖する地帯をルートを選び進むが、北緯40度20分55秒東経92度17分30秒地点で再びスタック。今度は下が水分を含んでいる地形なので脱出不可能と判断しトラックを放棄する。2日分の燃料、水、食糧をジープ4台に移し夜を徹してハミに直行。途中北緯40度23分37秒東経92度21分15秒に唯一の真水井戸あり。体を洗う。ロプノールと別れる。

6月16日(火) ハミにて休養 晴れ

シルクロードの通過都市なので外国人は少ない。3つの大きなバザールがあり楽しむ。ハミ瓜の収穫時期が9月なのでなかった。

6月17日(水) ハミ(9:00)→ウルムチ
(19:00) 晴れ

ハミから国道を一路ウルムチへ。トルファン手前のチェルチェンで昼食。ウイグルうどんをいただく。火焰山を右手にトルファンの町を左手に送り、夕方ウルムチ着。1700kmの走行。夜合同の祝賀会また白酒の嵐。

6月18日(木) 天池ツアー 晴れ

天山山脈のボゴダ峰を見に行く。奥田君が昔日本山岳会隊で登頂した5500m峰。美しい山。天山北面は水が多く緑が多い。南面と対照的だ。ウルムチに戻り自治区博物館に行く。「ローランの美女」はじめ2000年前に生きていた古代人のミイラを10体見る。「ローランの美女」は美しかった。

6月19日(金) ウルムチ(10:25)→北京
(14:00) 晴れ

飛行機からのボゴダ峰は非常に美しかった。北京で明日の大阪行CA921便のリコンファームをする。王府井の新華書店、外交書店で山の本を購入する。夜は久しぶりの本中華、羊肉とおさらば。

6月20日(土) 北京(8:40)→関西空港
(14:40) 晴れ

シルクロード、新疆ウイグル自治区はいい所でした。山深きタクラマカン砂漠の遙か南コンロン山脈のウルグムスターグ峰に登り、ロプノール、ローランに行きたいものです。



山岳会ニュースNo.24に「7月中旬 中央アルプス沢登り」と募集した手前、その顛末を報告します。

台高・吉野川黒石谷

田中博之

▽期日 10年7月18日～19日

▽メンバー 尾形・田中

もともとは7月11日、12日に山岳会の山荘を利用した沢登りと銘打って中御所谷か西横川を考えていたが、特に誰からもお声がかからない。しかも、駒ヶ岳ロープウェイは工事中でバスもなく下山手段もままならないという状況である。そこで計画を変更して尾形と白山大日ヶ岳の前谷川に行こうとしたが、雨で一週間延期。さらに悪いことに車が使えなくなって、前谷川にも行けなくなった。

かなりやる気を喪失してしまったが、尾形が黒石谷に行きたいという。黒石谷はぼく自身は過去に二度も行った谷であるが、吉野川（紀ノ川）の源流で比較的大阪からは近く、スケールも大きくてよい谷という認識があり、マア行くかと相なった。



近鉄阿倍野橋に8時30分に集合。尾形が先にホームに入っており、ぼくが外で待つという事態になって危うく40分発の特急に乗りそびれそうになる。

大和上市からは泡盛温泉杉の湯行のバスに乗り、終点で河合行に乗り継ぐ。大滝ダムも完成間近とみえて道路は杉の湯から先もほとんど新しくなっていた。柏木でタクシーを呼んでもらう。12時には河合に行くというタクシーが時間の許す限りということで入之波の少し先まで行ってくれた。

あとは車道を歩く。けっこう頻繁に車が通るが、どうもヒッチハイクという手段は学生の特権のように思えて、恥ずかしくてできない。黒石谷の出合まで一時間ほどかかり、車止めの柵を通過して谷沿いの林道を30分ほど行くと終点。天気はよいが、それほど暑くもない。

谷に入ると最近の雨の影響でかなり増水している。ほんの少し行くと早速ゴルジュの中にかかる滝が現れ、右岸の道に上がって巻く。谷に戻るもすぐに大きな釜のある多条の滝が登れずに左岸から巻くがここにはテープがついていて下降点が簡単に分かる。その上は記憶にある末広りの滝で直登できる。この滝上の徒渉が水量が多くて恐ろしくザイルを出す。二条の男女滝が見えるが、先に進めずに右岸を巻く。小尾根上に出て反対側を下れそうだが、先に明神滝が続いているのが見えて、行けそうなので止めて道に出て大きく巻く。ただしこの道は壊れかけているところがあり、ルンゼをまたぐ木橋が

朽ちて落ちそうで恐かった。しかし通らないわけにいかないのだ。



明神滝上は穏やかになりしばらくは谷を進めるが、扇状に落下する扇滝でまた行く手を阻まれ道に上がって簡単に巻く。小滝を越えていくとすぐに深切谷が出合う。ほどなく前方のゴルジュの先に霞滝が見えるようになる。ゴルジュの右岸をへつり上がって、立木から懸垂して最初の漣を越え、霞滝下の5m滝は左岸を登る。でもその先の大岩と間にかかる小滝が越えられない。で、写真だけ撮って断念。漣の手前まで戻って右岸の道から簡単に巻いてスゲ平谷の出合に着く。ただし道には木橋が落ちた箇所がありここを巻かないといけなかった。

出合は少し上がったところが台地上になって恰好のテン場である。周囲は杉林で伐材がたくさん落ちている。これがけっこうよく燃えてくれた。酒が二人にしては多すぎて少々酔ってしまう。



翌日、出発する頃には曇り出す。奥黒石谷に入っても滝は続いて、時々巻くこともあったが簡単。やがて鬼滝が現れる。下段は水量があり濡れるが簡単に登れる。上段は二条になってこれだけを鬼滝というのかもしれない。以前は左岸を巻いたように思うが、左岸には新しい崩壊が見られ壁が露出している。右岸は壁になっているが行けそうなので、尾形がザイルを出して登る。それほど難しくはなかった。でも最近岩を攀じるのはなにかそら恐ろしいぞ。こんな危ないことをしてはいけないという気になるな。谷に戻ると支流が出合う。しばらく小滝を越えていくとゴルジュが立ってその中に連瀑が続くところとなる。ここも安易に右岸の道から巻いたが、カンペではへつれることになっている。本当か！あとはきれいなナメ滝があって、これがフィナーレで右岸からの支流を見て朽ちた小屋のところで終了。



小屋の上の杉林を登って行くと明瞭な道が出てきて、30分ほどで林道に出た（なんと安易なつめ上げだ）。この林道は随所で崩壊しており、人が通るのもヤバそうなどところさえあったが、これを行けば簡単にドライブウェイに出ると考えたのが運の尽きであった。地図をまったく見ないでどんどん林道を行ったが、いっこうにドライブウェイに出ない。どうやら黒石谷の源頭をめぐる林道ができていたようだ（それが今は壊れて使い物にならないのだが）。この林道はずっとドライブウェイの反対斜面を縫っているらしい。雨も強くなってきたが、仕方がないので戻る。林道から植林帯に行く道を見つけてこれ

を登る。ずっと左の方へトラバースしてついにドライブウェイに出た。林道に出てから2時間もかかった。雨はもはや本降りて視界は皆目ない。この天気を車道を歩くのはつらいので尾形の伯母峰ルートは不採用として、少しだけ車道を歩くことで済む西大台ルートを採用。20分ほど車道を歩いて、小処温泉に向かう登山道に入り途中から西大台経由で頂上駐車場のバス停に行く。西大台にはけっこういいところがある。とりわけ松浦武四郎の碑があるところは泊まるのに最高である。

2時半のバスに乗り遅れて、頂上で2時間近くうだうだとビールを飲んで、4時半のバスで帰る。



黒石谷は道具建てが大きくて高巻きが多くなるきらいがあるが、すばらしい谷であることは確かだ。でも周囲は植林だらけで道まであるのはいただけない。やはり谷は原生林で囲まれていないといまいちである。

〈コースタイム〉

7月18日 カツラ谷出合付近(11時30分)～黒石谷に入る(13時30分)～スガ平谷出合(16時45分)

7月19日 出発(7時)～遡行終了(10時)～林道(10時30分)～まちがいに気付く(11時30分)～ドライブウェイ(12時20分)～頂上駐車場(14時40分)

槍・穂高縦走

山岳会行事山行報告

福山昇二

とき：平成10年9月12日(土)～14日(月)

参加者及び行程：小笹、久保田、伴、苑樹、
佐々木、大島、兵頭、福山

9月12日(土) 新穂高温泉8:30→9:40白出谷出合
10:00→11:00滝谷出合11:40→12:30槍平13:00→
17:10飛騨乗越→テント場17:30

9月13日(日) テント場6:00→槍ヶ岳アタック→テ
ント場7:30→9:45南岳→9:50南岳小屋10:10→14:00
北穂高岳14:40→16:40涸沢小屋→涸沢テント地

9月14日(月) テント場7:00→9:20横尾→13:20上高
地

＜12日晴れ＞久保田、伴、苑樹、大島、兵頭、福山は前夜、駒ヶ根のヒュッテ「雪線」に集合し、早朝出発、新穂高温泉で小笹と合流。1ヶ月前の群発地震でコース途中に崩壊があり、注意を促す警告表示があったが、飛騨側から槍ヶ岳を目指す。滝谷出合から見える上部岩壁のルート解説に花を咲かせ、休憩時間が長くなる。槍平から1ピッチの地点で小笹は古傷の膝痛のため下山することになった。今夏のアイガー東山稜の話の聞けず残念である。ここからは、前夜の睡眠不足と闘いながら、予定の槍ヶ岳のテント場まで辿りついたのだが、乗越近くでヤッホー・オイの声。前日、上高地から1人で入山し、テントを張ってしてくれた佐々木のコールであった。既に食べきれないほどのカレーが夕食として用意されていた(感謝)。テント組(佐々木、兵頭、福山)、小屋泊組(久保田、伴、苑樹、大島)に別れて就寝。

＜13日晴れ＞先ず、久保田、苑樹、大島、兵頭、福山の5名は槍ヶ岳の頂上へ。テントを撤収し新穂高へ下山する佐々木と別れ、北穂を目指す。南岳小屋から少し登った地点(キレットへの下降が始まる所)から滝谷の岩場が見渡せる。往年のクライマー達は昨日の単調な登りでは少々疲れぎみであったが、岩場になると軽快なピッチとなり、大きめなザックを担いだ兵頭、福山は若干遅れぎみとなる。

A沢のコルで昼食中、下降してきた登山者が落石に注意との忠告をする。福山のみ、そんなんいるんかいな！という視線を尻目に、持参したヘルメットを着用。10分登った時、伴、苑樹から落石のコール。運悪く大島が後頭部を負傷。出血していたので傷口を焼酎で消毒。地震で浮石が多く、先行者の人為落石と思われる。久保田のザックにあたった後であったのが幸いしたのか大事には到らなかった。一息入れて、北穂小屋まで注意しながら登山続行。小屋で大島は頭部の治療を受け、出血も止まっており元気なので先ずはビール。

予定では、涸沢岳を越えて穂高小屋までであるが、涸沢岳付近も先の地震で崩壊した箇所があり、通行できないという小屋の人の話から涸沢に下ることにする。紅葉の始まった涸沢カールを見上げると、前穂の北尾根、奥穂の稜線が見渡せる絶景に、涸沢小屋の生ビールをお代わりしてしまった。今夜は、食料も余分にあることから小屋泊組も窮屈ながら、テントに泊まることとなった。満天の星空を仰ぎながら、忘れかけた歌詞をつなぎ合わせ、山の歌を歌ったことは言うまでもない。

＜14日晴れ＞今日も晴れ。しかし、奥穂に登って白出谷から新穂に下ろか！という判の声に返事はなし。屏風岩、前穂東壁のルート解説をしながら横尾経由で上高地へ下山した。

女人結界考

和田城志

山登りの新記録の種類は色々あって、どうでもいいキャッチフレーズが横行している。中でも「日本人初」と「女性として最初」というのは見苦しい。くだらんとは言え、五大陸最高峰登頂とか、百名山、金剛千回登山のように、対象に対して「初めて」というなら理解もしようが、登る側の条件というか、資格というか、そういうものに「初めて」という形容は間違っている。登山者を問う時は、常にハンディキャップの程度を問題にする。つまり苛酷な自然に対して、弱い人間が如何にして挑戦したかというドラマを期待しているから、ハンディが大きいほど劇的に映るのである。障害者が山に登ると言えば、最高の賛辞となろう。ひねくれて言う訳ではないが、そういう飾り文句に何かいやらしいものを感じる。

ハンディは他人の評価の基準になるためではなく、本人の意欲を深めるために活かされるのである。というのも、順風にことが運んでいる時は良いが、過剰なほめ言葉は、逆境に会えばすぐ逆転して、女のくせに、歳相応にと批判に転向する。大体「女として初めて」と言う賞賛の裏には「女としてはようやった」という少し見下した姿勢が感じられてすきになれない。自然は人間なんぞに関心はないのであって、誰が頑張ろうが頓着していない。もし「初めて」を誇りたいなら、せめて「人類で最初」だけに限定すべきだろう。

この雑文のテーマには無関係であるが、以上のことを本文のまくらに書いたのは、自然に対して老若男女を越えて、人として向き合うことを主張したためである。

自然を舞台にして神秘的靈験を体得する修験道の中に潜む女性差別を、現実存在する女人禁制の山を手掛かりにして論じようと思う。差別という同族社会的臆病者の作法が如何に大自然のありようと相いれないかが示せば成功である。

禁忌

宗教的タブーは習俗、地域、戒律などに現れているが、山全体を女人禁制としているのは大峰山系山上ヶ岳が本邦で唯一であろう。山頂付近を囲むようにして四つの結界門がある。洞川登山口、稲村ヶ岳との鞍部レンゲ辻、大昔賢岳との分岐点阿弥陀ヶ森、そして吉野と結ぶ尾根上五番関の四ヶ所である。物々しい門構えと和英両文の説明書きの看板が立っている。

男ならばよくて女はダメという理由の納得できる説明

を論理的に展開するのは困難だろう。言い訳じみた説明は消極的媚の姿勢で二つ考えられる。一つは宗教的伝統だから守り続けたいし、こんな聖地が一つぐらいあっても誰も困らなんでしょうというもの。もう一つは、真剣に修行している山伏の気持ちも考えてほしい、山なら他にもいくらでもあるし、敢えて邪魔などしなくてもいいのではないか、大きな気もちで見守ってほしいというものである。柔らかな物腰、紳士然とした好々爺が実に磐石の自信をもって論ずるように言う。「何よ！それってあんたたちの勝手都合でしょう。私の自由まで規制しないでよ。」と、ちょっと美人のインテリが苛立って叫ぶ。

概ね女人禁制是非の議論の場面はこのように想像される。保守派の意見は、宗教的禁忌存在の普遍性を論じ、またその理由を存在してきた事実とその歴史的時間の量に求めて、禁忌の今日的意味は決して問わないという特徴をもっている。他方革新派はそういう立場を無視し、己が理念の主張逞しく、その論拠の正当性は揺るがない。その言い分が一ローカル宗教の禁忌の是非を越えて、人類のまさに今日的テーマであるところの男女平等への問題提起であるのであれば、保守派の意見などはなから対等に扱っていないのである。

そうであれば最早議論は成立しようはなく、話し合いに依る解決は望めない以上、以下のように推移するしかないだろう。ラジカルな反対論者の実力行使、結界石の破壊と女性による集団登山、もしくは、修験道関係者の譲歩、山上ヶ岳の解放である。外圧による急激な屈辱的変更か緩やかな知的自己変革か、つまり変わるようにしか推移しないのである。以前に梅雨の最中、奥駆け単独行をやった。雨の大峰山系全山縦走はなかなか素敵な山登りであったが、やはり冬黒部やヒマラヤと比べると見劣りするの否めない。そのボリューム、姿形、地理的奥行き、神秘性、隔絶した原始の自然、残念ながら迫力に欠ける。山上ヶ岳にいたっては最早山とは言えない。役の小角が未開の山岳奥地を開拓跋涉し、その靈験に触れた場所ではなくなっている。女は登ってはいかんなどという姑息な山など私の方から願ひ下げだから、修行の邪魔をする気もないし伝統を踏みじめる気もないが、私の不快感は治まらない。

修験道の根本理念を知る由もないが、自然の靈験と山岳信仰の神秘は理解できる。山上ヶ岳の自然の中に聖なるものを感じたいのであれば、まず林道や登拝道のような人工的な道路を排し、極力不要な建造物を無くすことが大切だ。不便な本来の山岳地に作り替えることこそ、俗から隔離された聖なる場所としての必須条件である。女が登っても山は痛くも痒くも汚れもしないのであって、茶店や売店、宿坊施設の営みの方がはるかに山を汚している。大峰山寺周辺に林立する石塔（勧進布施の仰々しい名前の刻まれた）なんぞは見苦しく、すべて撤去したらどうか。簡素な山寺と清涼な気配、山岳修験の根本道場に相応しいと思うのだが。

穢れ

手前勝手な願望ばかり喋ってしまった。

修験道実践者の積極的本音を類推して、女人禁制維持の理由を否定すると、その理由第一に修行の妨げとしての女、その第二に穢れとしての女が考えられる。まあ今時こんなことを露骨に主張する輩はいないだろうが、一八七二年（明治五年）に太政官布告として女人禁制廃止令が出されたにも関わらず、百年後の今も根強く残っているのは、深層にその考えが横たわっているからだろう。自由と平等に複雑な解釈をする人が多いが、そんなに難しい概念じゃない。人がして欲しくない事以外何をしてもいい、自分がしたいことは人にも認める、ただそれだけのことだ。以下これらの仮定が間違っているのなら、この文はご破算にしなければならない。

修行の妨げというのであれば、女はどこで修行をすればいいのか、尼寺があるなど詭弁はいまい。修行条件が男女の隔離であるのなら、女人禁制と同数同量の男子禁制があってしかるべきなのに、歴史上そんなことはあり得なかった。修行は男側の都合ばかりが優先し、実質男社会の独占であったと云っていい。稲村ヶ岳を男子禁制にしてバランスを取ろうなどというのは理論のすりかえで話にもならない。

カラコルム登山で連絡符校と議論したことがある。「イスラム教圏では何故女がチャドル（身体をすっぽり被い隠すヴェール）を着るのか」と聞いたとき、彼曰く「女の顔やボディラインを見ると男が変な気を起こすからだろう。」「それならそういう男の目をつぶしたほうが手っ取り早いじゃ無いのか。」「……」彼は返答に窮した。同様の論法で、女人結界石の裏側に男子結界と刻めばどうだろう。結界石とは、修行の障害となる悪魔（この場合、互いに男と女）が聖域に侵入するのを防ぐための境界石のことである。山に入れば二度と下界に下れなくなって、さぞや女性も修行に専念できよう。それが平等というものだ。実際には苦行を終えて下山すれば、酒と女が待っているというのが現実で、つかの間の精進深斎よりも圧倒的の精進落ちの日々こそが目的なのである。

確かに女から離れないと修行できないというのは切実な現実であろうが、それを女のせいにするのは少々甘えが過ぎるというものだ。女に来るなどは云わず、女のいない所に行けばいいのだ。冬黒部には女はいない、いたとしても会うことはまず無い。修験道の開祖たちはそういう地を求めて山深く分け入ったのではなからうか。その精神こそ受け継ぐべきであって、管理され整備され尽くした似而非自然の山上ヶ岳で、女が修行の妨げになるなどという詭弁が通用するはずがない。

私は女人禁制の本当の理由は「穢れ」の思想にあると思っている。黒穢（死、埋葬）、赤穢（月経）、白穢（出産）の三穢を忌む思想の反映であると思う。キーワー

ドは血である。ルーツはインドであろう。仏教発祥の地であり、現代でも動物神聖性を認め、殺傷を嫌うベジタリアンの多いお国柄である。反対にキリスト教圏では、ブドウ酒をイエスの血といい、生け贄儀式のあった遊牧文化であれば、あまり血を忌んでいないように思われる。とにかく血を忌む考えが穢れの思想の根幹をなしていると思われる。穢れは避けられ清められなければならないから、血に関係する者は蔑視される事になる。女性であり、屠殺に携わった被差別部落である。カースト制度というおぞましい前近代的制度がぬきがたく残っているインド社会において、女性差別はその頂点にあり、女児出産における間引きは日常的だと云う。差別構造の典型をこの血を忌むという考えの中に見る。

私はこの考えの歴史的背景に科学的根拠が与えられたとしても、これを認めない。自我の拠り所である個の誕生、つまり生殖と出産と、その終着である死が穢れているはずがない。既存の宗教の中で、これを主張するものは拒否する。その出発点の二つを受け持つ女性が穢れていると考えることは到底許す訳にはいかない。こんな迷信を主張するやつがしたら、私は言葉より腕力で話をすることにしている。問答無用だ。母親や娘に向かって「女は穢れている」と言える男は知性の欠けた非理性的人間であって、ようするにただの阿呆である。

しかし、この考えに裏打ちされた禁忌は実に多くの宗教儀式や日常生活習慣の中に存在する。月の障りや出産した女の禁忌、またその反映としての処女や初潮前稚児の崇拜、色々な形で現れている。以前話題になった、土俵上での表彰式において、日本相撲協会は当時官房長官だった森山真弓の出席を拒否した、土俵には女は上げられないという理由で。伝統という物言わぬ因習に固執する者は、自覚せぬ内にその中に巣くう時代錯誤に気づかず、無批判に踏襲していく。

方便

哲理とは常に不完全であり、すべての完璧を期した宗教教義でも発展修正する可能性がある。仏典も聖書もコーランも少しずつ好ましい方向に解釈され成長しなければならない。それらは結論ではなく、始まりでありつづけてきたからである。釈迦やイエスやマホメットが少しくらいミスをしたからといって、誰も咎めたりはしない。

山上ヶ岳や土俵に女を上らせないことはどうでもいい問題かもしれない。しかし、それを問題とする人がいる以上、無視する訳にはいかない。相撲は興行であり、宗教は布教を旨とする以上、大衆の支持が無ければ維持できまい。女を敵に回して勝てるはずがない。

宗教とは、元来、革新性、現状批判にこそその存在理由があって、細々と法灯を守るといよりも、より輝く火種を模索する方が似合っている。聖徳太子の政教一致、仏教国教化に始まり、権力に烏合する奈良仏教と反朝廷

聖集団、天才空海の反逆、貴族化する平安仏教と土着と結ぶ山岳修験道、民衆済度の鎌倉仏教大変革、形骸化する巨大教団、明治新興女教祖、そして世襲する葬式仏教と新カルト集団。私は山が好きだから、山岳を修行の場として精神の浄化を図る修験道に興味をもっている。原始神道に密教、道教的の神仙思想、ベースは自然信仰であろう。本邦精神の五目寿司の感がある。これらの中を通徹するものは精神と肉体の二元論、それは姿を変えて色々に表現される。曰く、浄土と地獄、聖と俗、精神的理性的存在としての男、肉体的感情的存在としての女、女人禁制は我々の生活の隅々にこびりついた精神史の残滓である。

大自然の生きとし生きるもの、生殖と死は最も崇高な営みでこそあれ、忌み嫌われるものではないはずだ。浄土などあるはずがない、地獄などあるはずがない、聖なる貴人も俗なる賤民もない、全ては人の構えしところである。全ての聖地は人の想いの産物に外ならず、たかだか二千年の歴史でしかない。時代が変われば、ものごとくも変わる。聖地はいつか定められ、時の流れとともにその終焉に至る日々を生き続ける。それはあたかも一個の人間が、生まれながら人間ではなく、ましてや男でなく女でなくヒトとして生まれ、一生をかけて男になり、女になり、自分という人間になっていく過程に似ている。そして死を迎えるという点においても。

女人禁制の是非は信仰の有無を越えて遙かに重要なテーマ、人間の自由と平等という根源的な理念の問題なのである。東西冷戦イデオロギー論争が終焉した後にも根強く残る民族紛争、宗教戦争は今世界の最重要課題になっている。聖なるものは心の内にこそ育てるものであって、他を排する特別な地はなるべく少ない方がよい。

女人禁制は多くの女性を不愉快にしていると思う。人類の半分を敵に回すような考えが正しかろうはずがない。宗教も哲学も科学も政治もすべて変化する。神も仏も生まれた時があるのだから、いつか死ぬだろう。変化を恐れることはない。タブーは常に破られる定めにある。数年前の冬山、山上ヶ岳で女性の登山者に会ったことがある。実際は多くの女性によって山頂は踏まれている。彼女らは気を使って、修験道関係者のいない厳しい気象条件の季節を選んで登っている。梅雨どき、雨の降りしきる奥駈道で五十過ぎの女性に会ったこともある。那智山青岸渡寺より吉野へ、大峰山奥駈け順峰入りを目指していた。山上ヶ岳を避けるべく、阿弥陀ヶ森より柏木へ下り、再び吉野へ入山すると云っていた。厳しい冬の頂を目指す女性登山者、雨の奥駈けに賭ける女行者たちの方が、講を組み集団登拝する大先達よりも、彼の山に似つかわしい。役の小角は優しい微笑で彼女らを見守っているだろう。

女人結界石は有名無実、最早その実質的意味は失われている。山上ヶ岳が名実ともに全ての人に一日も早く解放されんことを切に望む。

雪の五番関にて、結界門に残された獣の足跡を見て詠める。

気にするな 行きつ戻りつ メスダヌキ
よにん結界 ひとの方便

(女人禁制の報道を読み、三年前の原稿を取り出してみた。岳人編集部コメントをと云われて)

編集後記

- ▼台風近畿直撃で、被害に遭われた方、お見舞い申し上げます。
子供のころにときどきわくわくした気持ちをちょっと思い出しました。
- ▼和田さんの文章を読んで。変わるようにしか推移しないものはたくさんあるけれど、そういうものはなかなか自己変革できる能力のあるものは少なく、結局は外部の圧力によって変わらざるをえないわけで、結局すべてがこうして次々と露呈しあふたしているだけ。テレビで話題になることでも、そして身近なことでも。なんだかちょっと憂鬱です。
- ▼会員小倉裕史氏が2年に1度開催する『木の仕事展』が、今年下記のように催されます。皆さん是非ご来場下さい。

日時 11月12日(休)～1月17日(火) 11時～19時(最終日は16時)

場所 画廊さぶ(阪急梅田駅茶屋町口から3分) TEL06-376-3278